

053 地の塩、世の光、そして律法について(山上の説教Ⅲ)

マタイによる福音書 5 : 13~20、マルコ 9 : 50、ルカ 14 : 34、35)

▶地の塩、世の光 (マタイによる福音書 5 : 13~16)

13 「**あなたがたは地の塩である。だが、塩に塩気がなくなれば** (→岩塩—日本では岩塩が採れる場所はありません—の場合、塩分が抜けて、不純物だけが残し、塩気が無くなる場合がある)、**その塩は何によって塩味が付けられよう。もはや、何の役にも立たず、外に投げ捨てられ、人々に踏みつけられるだけである。**

→塩は調味料や防腐剤として用いられた。塩が食べ物の味付けをするように、他者を助けるべきだと、イエスは語った (マルコによる福音書 9 : 50、ルカによる福音書 14 : 34、35)。

→土粒子の安定化についての報告

多くの場合、土粒子に食塩 (道路を舗装するするときの材料) を混合する (→塩による安定処置) と土粒子の安定化が安価に出きる。米国ではこのような安定化工事が盛んに行われ、維持費は 70~80%削減されると報告されている (道路への塩利用 1959 年 日本専売公社)。

14 **あなたがたは世の光** (→You are the light of the world. 新改訳:世界の光) **である。**

→聖書では、神の言葉は「照らす灯」にたとえられる (詩編 119 : 105)。

タイトル(書名)	章:節 聖句	【検索対象総数 : 3 / 聖句等の総数 33250 (世の光)3個】	聖書Navi Active 393128091 (新共同訳) 【検索語彙 : 世の光】
S ヨハネによる福音書	8:12	イエスは再び言われた。「わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ。」	
S ヨハネによる福音書	9:5	わたしは、世にいる間、世の光である。」	
S ヨハネによる福音書	11:9	イエスはお答えになった。「昼間は十二時間あるではないか。昼のうちに歩けば、つまずくことはない。この世の光を見ているからだ。」	

14b **山の上にある町** (→エルサレムやガリラヤ湖畔の町々) **は、隠れることができない。**

→リビング・バイブル: 丘の上にある町は夜になると灯がともり、だれにもよく見えるようになります。

15 **また、ともし火をともして升の下に置く者はいない。燭台の上に置く。そうすれば、家の中のものすべてを照らすのである。** 16 **そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい。人々が、あなたがたの立派な行いを見て、あなたがたの天の父をあがめるようになるためである。」**

→ともし火: 当時、両手で包めるような小さい陶製のランプでオリーブ油を燃やした。

神の言葉は「照らす灯」にたとえられる (詩編 119 : 105)。

→詩編 119 : 105

あなたの御言葉は、わたしの道の光／わたしの歩みを照らす灯。



▶律法について (マタイによる福音書 5 : 17~20)

17 「**わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思ってはならない。**

→律法は旧約聖書の最初の五書 (創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記) である。

→預言者は旧約聖書の預言書 (ヨシュア記、士師記、サムエル記、列王記、イザヤ書、エレミヤ書、エゼキエル書、そしてホセア書、ヨエル書、アモス書、オバデヤ書、ヨナ書、ミカ書、ナホム書、ハバクク書、ゼファニヤ書、ハガイ書、ゼカリヤ書、マラキ書の十二預言書) である。

→イエスの公生涯の時代は、モーセの律法が当然有効で、イエスご自身もそれに完全に従われた。

しかし、ファリサイ派の人たちはモーセの律法を破壊し、ユダヤ教のラビの口伝を集成した「口伝律法 (ミシュナ)」に従っていた (口伝律法は、AD220 年頃まで成文化されていなかった)。

17b 廃止するためではなく、完成するためである。18 はっきりしておく。すべてのことが実現し、天地が消えうせるまで、律法の文字から一点一画も消え去ることはない。

→リビング・バイブル：17 誤解してはいけません。わたしは、モーセの律法や預言者の教え（旧約聖書）を無効にするために来たのではありません。かえって、それを完成させ、ことごとく実現させるために来たのです。18 よく覚えておきますが、聖書にあるどんなおきても、その目的が完全に果たされるまで、無効になることはありません。

19 だから、これらの最も小さな掟を一つでも破り、そうするようにと人に教える者は、天の国で最も小さい者と呼ばれる。しかし、それを守り、そうするように教える者は、天の国で大いなる者と呼ばれる。

20 覚えておくが、あなたがたの義が律法学者やファリサイ派の人々の義にまさっていなければ、あなたがたは決して天の国に入ることができない。」

→「天の国」という言葉は、マタイによる福音書（対象：ユダヤ人）のみにしか登場しない。これは、マタイが、ユダヤ人読者のことを考慮して、「神」という言葉を意図的に避けていると思われる（3：2/4：17/5：3、10、19、20/7：21/8：11/10：7/11：11、12/13：11、24、31、33、44、45、47、52/16：19/18：1、3、4、23/19：12、14、23/20：1/22：2/23：13、25：1、14）。また、マタイは、「神の国」という言葉も下記の5聖句で使用している（6：33/12：28/19：24/21：31、43）。

→律法学者の多くはファリサイ派に属していた。ファリサイ派は、律法遵守、特に安息日や断食、施しを行うことや清めの儀式を強調した。

山上の説教は、イエス・キリスト（メシア）による律法の解釈である。

ファリサイ派の人たちは、律法の外面的な服従にこだわった。これに対し、イエスは、内面的服従と外面的服従の両方を教えた。山上の説教は、私たちの救いの道を示したのではなく、教訓を学ぶものであって、現代のクリスチャンに求め、守るべきものではない。

【参考】 塩にまつわるエトセトラ

<1>人間が誕生まで育つ羊水の成分バランスは海水と同じような比率でナトリウム、マグネシウム、カルシウム、カリウムなどの元素が含まれています。"海"という漢字は、水に人の母と書きます。フランス語の海、ラ・メール(mer)は母 (mere) の意です。うみ、産み、生み、海は生命のふるさとであり、「塩」はその海のエッセンスといえます。

<2>大乘仏教の経典の一つ法華経には『すべて、如来の寿命は海中にあり』とあります。

<3>サラリーマンの「サラリー (salary)」は古代ローマ時代に兵士に与えられた「塩」を意味するラテン語の「サラリウム (salarium)」が語源と言われています。また「すべての道はローマに通じる」とされた古代のローマ街道の中で、最も華やかだった「サラリア街道 (Via Salaria)」は、その名の通り「塩の道」のことで、サラリア街道における塩の交易がローマという街が誕生した原点であったとも言われています。

参考/出典：(株)天塩



【参考】 貧困者に支持者の多いファリサイ派 →ヘレニズム(=ギリシア風)文化に対して否定的

ユダヤ教の教派で、イエスの時代に最も高く評価されていたのは、中間時代に誕生したファリサイ派で、この時代、民衆にとっては、ユダヤ教=ファリサイ派的ユダヤ教であった。

ファリサイ派はハスモン朝※1時代に形成され、天使、悪霊、魂の永遠性、死後の世界を信じ、律法遵守を徹底し、特に安息日や断食(週2回、木曜日と金曜日)、施しを行うことや清めの儀式を強調した。

律法学者(モーセ五書<トーラー>—創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記—を研究する学者)の多くがファリサイ派に属し、聖書(旧約)の独自の研究と伝承による解釈を固執、主張した。聖職者である律法学者(ラビ rabbi)を信仰の仲介者とし、ユダヤ人会堂の多くを管理していた。ファリサイ派は、律法を研究、遵守して、どのように生きるべきかについて教えていたために、民衆に尊敬されていた。

ファリサイ派の名称は、「パルーシム (パルシム)」 = 「分離する者」あるいは「清い者」を意味するヘブライ語に由来するとされるが、正確には不明である。

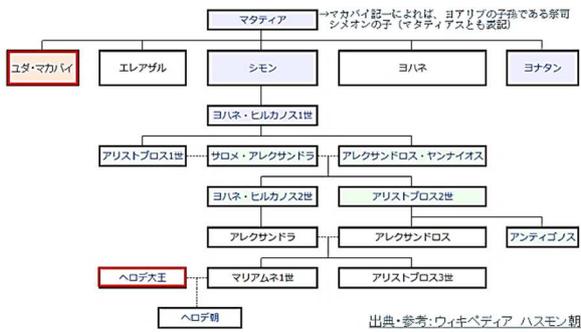
ユダヤ人指導者の中には密かにイエスを信じる者もいたが、ユダヤ人会堂から追放されるのを恐れ、このことを公言しなかったし、もし、それが発覚した場合は、ユダヤ人指導者たちは、イエスを信じるようになった者をユダヤ人共同体や会堂から追放した (ヨハネによる福音書 9 : 22)。

イエスを訪問したニコデモは最高法院に属する議員で、ファリサイ派の教師でもあった (ヨハネによる福音書 3 : 1)。

また、ファリサイ派の人々はイエスが自分たちの立場や影響力を脅かすと考え、イエスを殺そうと企んだ (マタイによる福音書 26 : 1~5、マルコによる福音書 14 : 1~2、ルカによる福音書 22 : 1~6、ヨハネによる福音書 11 : 45~57)。

エルサレム神殿の崩壊 (AD70 年) 後はユダヤ教の主流派 (神殿に拠っていたサドカイ派は消滅) となり、会堂に集まって聖書を読み、祈りを捧げるスタイルが、ユダヤ教のスタイルとなっていた。

※ 1 : BC 140 年頃から BC 37 年までユダヤの独立を維持して統治したユダヤ人王朝。BC 166 年に起きたユダ・マカバイによるセレウコス朝軍への決起から約 20 年後に成立。フラウィウス・ヨセフスによればハスモンという名は一族の先祖、祭司マタティアの祖父の名前に由来しているといわれている。



フラウィウス・ヨセフスは、帝政ローマ期の政治家及び著述家である。AD66 年に勃発したユダヤ戦争でユダヤ軍の指揮官として戦ったがローマ軍に投降し、ティトゥスの幕僚としてエルサレム陥落にいたる一部始終を目撃、後にこの顛末を記した「ユダヤ戦記」や「ユダヤ古代誌」を著した。

ヨセフスは、青年時代にサドカイ派やエッセネ派などを経て、最終的にファリサイ派を選んでいく。